

「昔、学校はなくとも勉強はしていた」

1 文字が分からなくては暦が読めない。

江戸時代後半でも、暦は100万部も出版されていたと、ある本に(注1)に書かれている。当時、これはおよそ一家に一部の割合だと。それだけ暦が重要視され読み込まれていたことになる。その頃の暦は、現在の太陽暦でなく大陰暦であったが、季節的社会的行事(例・正月、春分、彼岸、冬至、節分、社日、土用)や日の吉凶ばかりでなく、人々の運勢までも分かるという、庶民にとっては無くてはならない生活指針の役割をもっていたにちがいない。それにしても、字を知らねば暦も読めない。また、読み書きができなければ商売も営めない。百姓でも商取引に参加する時勢となってきたいる筈だ。(注2) そうであれば、今のように学校のない時代、どのようにして勉強していたのだろうか。そして国民はどの程度文字を知っていたのだろうか。参考書をあれこれ探し読んでみた。

2 江戸時代の識字率は?

ロシアの海軍少佐ゴロヴニンはその著「日本幽囚記」(1816年版)で「日本には読み書きの出来ない人間は一人もいない」とベタ褒めてあるが、これはチョット過大評価と言わざるを得ない。(注3) 司馬遼太郎氏は「江戸末期の識字率は70%以上で同時代の世界で比類がない。」と書かれている。(同氏著「風塵抄」)だが、元駐日大使のライシャワーさんは「江戸の日本の識字率は、男子45%女子15%で当時の欧米先進国とあまり違わない」と同氏著「ザ・ジャパニーズ」に書いておられる。

しかし、いざれが正しいかはここで詮議しようと思わない。当時のわが国の教育水準が高く国民がよく勉強していたことが分かればよい。とはいえ、私の知りたいのはこの地区のことである。

3 この地区で、学校のない頃勉強はどこで?

明治維新となって、新政府は、「邑に不学の戸なく、家に不学の人なかしめん事を期す」として、明治5年に学制が定められた。しかし、だからといって全国に小学校が直ちに設立されたわけではない。今地区でも、明治6年から、取りあえず、辰巳村や中仙道村での私塾を学校としたようで、独立の校舎を持つ小学校(4年制)は、「順則小学校」の校名で、明治9年辰巳村に設置されたのが初めてである。

以上は前置きで、主題の、学校のなかった明治4年以前のことを書かねばならない。このことを知りたいと「岡山市史(S43年刊)」についてみると、市内に開設されていた「寺子屋」の記事がある。そして、今地区でも寺子屋があったことを初めて知った。

さらに、田中野田の原 房五郎さんが塾を開き教師をされていたことも。(寺子屋と言っても、この場合は主として読み書きを教える私塾で教室は大体本人の住宅や納屋

であった)

今地区内の寺子屋

所在地	開業	廃業	男生徒	女生徒	教師
中仙道村	安政3年	明治5年	13	7	長瀬直正
"	嘉永6年	"	20	20	蟲明整
西長瀬村	慶応3年	"	15	6	金輪清次郎
今村	慶応元年	明治3年	23	8	大森眞平
田中村	明治4年	明治5年	18	7	原房五郎
辰巳村	"	"	6	5	延友清一
"	"	"	16	5	長瀬浪次
合計			116人	58人	(注4)

教師先生方の略歴大要(分かった方のみ一敬称略)

氏名	出生年	死亡年	現世帯主との関係	公職経歴
長瀬直正	不明	不明	(大阪へ転出)	白鬚宮神官
蟲明整	弘化1年	明治17年	蟲明千恵子の祖父	戸長、教員、郡書記
原房五郎	嘉永5年	大正8年	原一郎の曾祖父	村委会議員、収入役
長瀬浪次	嘉永4年	明治43年	長瀬孝一の祖父	順則小学校長・ 今村小学校長・ 今村助役

追記 上表でみると長瀬浪次は20歳で、原房五郎は19歳で塾を始めておられる。明治維新の大改革に際会し、若い情熱と次代を担う少年の教育に注がんと、希望に燃えての決意の表れであろうと想像する。浪次青年や房五郎青年がどこで勉強されたのであろうか、知りたいが今では不可能。多分、岡山城下町の漢学塾だろうと推察するのみである。(当時、市中の漢学塾は40カ所くらいであったようだ—岡山市史より)

注1 女子美大教授、暦の会会長岡田芳朗著「暦と運勢がわかる本」のことである。この本に、天保時代の暦の一部分を撮った写真が載っていたが、当時は木版刷りで、文字も漢字は行書体、ひら仮名はみみずがはったような変体仮名であるから、私には大変読みにくい。昔の人は、これがあたりまえとして字を習っていたのであろうから、そもそも思わなかつたのだろうか。(文字より暦をどう理解するかが、もっと重要だが、ここでは触れない。)

注2 福沢諭吉の「福翁自伝」で、安政2年、下関から大阪へ船で行くについて、中津の鉄屋惣兵衛から下関の船場屋寿久右衛門あての二セ手紙を書いて“賄代の後払い”を認めてもらっている。このことは、諭吉が旅費の不足で苦肉の策をとったことの証明であるが、ここでは、双方の商人が字が読めたり書いたりできることの説明であるとともに

に、読み書きの能力がなければ商売も出来ないということの証しの一例として取り上げてみた。

また、早島町では今から290年くらい前の宝永年間に、裏作として藺草が盛んに栽培されていたそうだから、(同町歴史資料館の資料による)この地方でも、同じ頃、藺草が栽培され畳表も織られたことと思う。そして当然に、藺製品の売買も行われたであろう。したがって、農民でも計算ができなければならず、字も書いたり読めたりする必要があったに違いない。

注3 ゴロヴニンさんは、1811年国後島で捕らえられ、26箇月余日本に抑留された後釈放されたロシヤ軍人であるが、この短い期間でよくも日本の事情を知悉し得たものと感心する。この本(幽囚記)で、日本人の識字率について述べた後、さらにロシヤ人のことにふれ「ロシヤには、学者も大勢いる。しかし、天文学者一人について3つの数も読みこなせない人間が千人もいる。」と嘆いている。天文学者が何人いるのかが不明なので、かずの分からぬ者の人口割合も計算できないが、ゴロヴニンさんも、計算に強い日本人に接してつい愚痴がでたのであろう。

注4 当時の今地区の人口は分からぬが、仮に明治12年の人口(今村史所載のものに一部推定を含む)に、今村の大正12年年齢別人口構成から割り出した6—9歳の推定人口比率8%を乗じて得た要就学人口は162人となる。この数と、当時の今地区の寺子屋の就学者数男116人女58人合計174人という数字とを単純に比較はできないが、想像より多くの人が勉強していたのに驚かされる。

平成9年1月号 第41号
(中 尾 佐之吉)